世界中の
どこにいても

Mu

世界中のどこにいても（前編）

「じゃあね。ヒロキくん、また明日」
「あ、ああ……あの、アキ」
「ん？」
　俺の言葉に歩き出し掛けていたアキが振り向いた。その瞳が小さく揺れる。
　俺は、言いかけた言葉を飲み込んだ。
「あ、いや、うん。また明日な」
　アキは少し寂しげに視線を落とすと、それを振り払うように笑顔を見せて手を振った。
「バイバイ」
「ああ」
　俺は立ち去るアキの後ろ姿を見つめながら、ふーと息を吐いた。
　あと何度、俺達はこうやって別れの言葉を交わすんだろう？
　何度、交わせるんだろう？
　そうして、俺達は……。

　俺がアキと出会ったのは、大学の専門課程に進んでからだ。
　たまたま同じ研究室に入った。
　彼女はとても優秀な学生で、そのまま大学院に進んだ。
　おれも、なんとか同じように院に進学。
　それから、俺達は同じ研究室で進学した仲間として、かなり濃い時間を過ごしてきた。
　お互い徹夜実験で泊まり込んだこともあるし、研究発表のセミナーで激論を交わしたこともある。
　そんなとき、彼女の優秀さ、研究に掛ける情熱には驚かされた。
　研究だけでなく、夏・冬の研究室旅行で海水浴や温泉に泊まりがけでいったりもした。
　それになにより、みんなでよく飲んだ。
　そういった、オフの時の彼女は気さくで、よく気が付いて、その上酒が強いという、なんというか呆れてしまうぐらいだった。
　そんな彼女は、俺にとって妙に眩しく見えた。
　だから、いつの間にか、彼女のことがいつも気に掛かるようになっていた。
　この気持ちは、なんだろう？　これは恋なのか？　それとも、ただのあこがれ？
　俺にはその気持ちがはっきり分からなかった。
　はっきりさせる必要も感じなかった。
　でも本当は、はっきりさせる勇気がなかったんだ。
　そして……そのまま二年が過ぎようとしていた。

ある日、俺はその話を聞いた。
大学院修士課程が終わったら、彼女は当然、博士課程に進むと思っていた。
いや、それは間違っていなかったんだが、彼女が進むのはここじゃなかった。
そう、彼女は……留学するのだ。
アメリカ東部の有名な大学の研究室に進むという。
それは、彼女ほど優秀なら十分やって行けるだろう。だけど……
俺は自分でも信じられないほど動揺した。
アキがいなくなってしまう。
いつも切磋琢磨して、時にはバカなことをやって来たあいつが。
これからも、まだ三年はそんな生活が続くと思っていたのに……
三年は猶予があると思っていたのに。
……猶予？　猶予ってなんだよ？
俺は、なにを待ってもらっていたんだ？

とぼとぼと下宿に向かって歩きながら、俺はあと何度あいつとこうやって徹夜実験明けの道で別れの言葉を交わすのだろうと思っていた。
もう、別れは間近に迫っていた。

三月の終わり、研究室恒例の泊まりがけの卒業生追い出し宴会があった。
今年は四年で卒業する学生が三人、修士で出るのが一人、学位を取ってでていく先輩が三人だった。
もちろん修士で出るのは、アキだ。
「うわーん、アキ先輩。アメリカに行っても頑張ってくださいー」
「うん。うん。ありがと。エリちゃん」
「研究室が、寂しくなりますー」
「矢野くんも、修士頑張ってね」
「さ、さ、もっと飲んで。飲み足りないだろう？」
「大山先輩こそ、はい、どうぞ。一緒に飲みましょう」
アキの周りは賑やかで、まるでお祭りのようだった。
俺は、つがれたビールを飲み干す彼女を横目で見ながら、自分で盃をあおった。
「松原先輩、寂しいですね？」
「はあ？」
今年出ていく四年生の女の子が俺にそういう。
「なにいってるんだよ。おまえなんか、いなくなっても、寂しかないよ」
「あー、ひどーい」

「おまえが触ると、実験器具が壊れないか、いつもびくびくしてたからな」
「先輩、それ、言い過ぎです」
「そうか？」
「そうですよ～」
　彼女は口をとがらして抗議すると、ちょっと真顔になっていった。
「アキ先輩のことは、どうですか？」
　ブッ！　コホコホ……
　いきなり、飲んでた酒が喉に詰まってむせた。
「キャー、先輩、なにむせてるんですか！？」
「い、いや、なんでも、ない。ちょっと、気管にだな……」
　後輩の女の子がジト目で俺を睨む。
　俺は黙ってもう一度コップに酒をつぎ直して、喉に流し込んだ。

　宴会が進んで盛り上がれば盛り上がるほど、俺の意識は沈んでいった。
　酒に酔った朦朧とした中で、視線は彼女を追っている。
　先輩たちと飲み比べをしている彼女。
　頬がほんのり染まり、陽気に笑っている。
　……ったく！　相変わらず、うわばみだな。酒がかわいそうだ。でも……
　楽しそうだな。
　もう、お別れなのに。もう、会えないのに。
　けど、あいつにとっちゃ、新しい旅立ちだから、わくわくして当然なのか。
　残る方は寂しいもんだぜ。
　……て、俺はやっぱり寂しがってるのか？　あいつがいなくなることを。
　ま、まあ、仕方ないか。今まで、ずっと近くにいたからな。だから、ちょっと寂しいだけだ。
　いないことになんか、すぐ慣れる。そうすりゃ、すぐ忘れる。そのまま、会わなけりゃ……

　その時、俺の心臓がドクンといやな音を立てた。
　このまま、会わなくなる？　二度と彼女に会えないかもしれない？　そうなのか？
　胸が苦しくなって頭がぐるぐる回る。
　酔いが俺の体の自由を奪った。
　俺はそのまま倒れるように気を失った。
　最後に、誰かの瞳が見えたような気がした。

「つー、頭痛てー」

　俺は頭の締め付けられるような気持ち悪さに目を覚ました。
　暗い天井に小さな常夜灯の明かりが見えた。
　ここは、どこだ？
　さっきまでいた宴会場ではなく、宿の個室のようだった。体に布団が掛けられている。
　誰かが、運んでくれたのか？
　自分もよく酔いつぶれた後輩を運んだ経験があるので、そうだろうと思った。
　それにしても、今何時だろう？
　どこかに時計がないかと顔を動かして周りを見ようとした。
「え？」
　思わず声が出た。そこに、信じられない光景。
「な、なな、なっ？」
　とっさに言葉がでない。
　俺が見たのは……なぜかアップのアキの寝顔。
　俺の傍らの畳の上で彼女がすやすやと寝息を立てていた。

　ええー？！　ど、どうして？！
　とたんに心臓が騒ぎ出す。
　彼女をこんな近くで見るのは初めてだ。閉じた目蓋に長い睫毛が印象的で、その面（おも）から視線をはずせない。
　なんで？　どうして？
　こいつ、こんなとこで寝てるんだ？
　焦る脳裏に答えられない疑問が浮かんでは消える。
　酒に酔っていた頭では、まともな考えなんて出てこない。もっとも、酔ってなくても同じかもしれないけれど……
　その時、慌てる俺の前で、今まで寝ていたはずの彼女がぱちっと目を開いた。
「あっ」
　一瞬、見つめ合った。驚きで心臓が跳ねる。
　俺は焦って上体を起こした……のだが。
　あ、あれ？　なんか、世界が揺れてるぞ？
　俺は、そのまま再び倒れ込んでしまった。
「うわ！」
「きゃ！」
　気が付けば、なぜか、彼女の上に乗っかっていた。

「う、うわー、すまん！」
　慌てて彼女から離れる。容赦ない叱責が飛んできそうだった。
「すまん。めまいがして、それで……」
　謝りつつ彼女を見ると、怒るでもなく慌てるでもなく、今まで見たことのない真っ直ぐな視線でアキは俺を見つめていた。
「……アキ？」
　不審に思いつつ、俺はもう一度体を起こそうとした。そのとき、彼女が口を開いた。
「待って。ヒロキくん」
「え？」
　俺はもう一度彼女を見つめた。その瞳が今度は揺れるように動いた。
「えっと、その……お、お礼、言ってよね」
「ん？」
　お礼？　なんのことを言ってるんだ？
「あなたを運んだの、わたしなのよ」
「え？　おー、そうなんだ？！」
　ちょっとびっくり。
「それは、ありがとうな」
「結構重くて、大変だったんだから」
　そ、そうだろうなあ。どうやって運ばれたのか、気になるぞ。
「すまん。だけど、他にいなかったのか？」
「うん。みんな、酔いつぶれちゃってたから」
「はあ？　みんな？　情けないなあ」
　俺は、あらためて、彼女の酒豪振りを知った思いだった。こいつ、あんなに飲んでたくせに。
「それにしても、おまえ、やっぱり底無しだな」
「あ、そんなこと言う？」
　とたんにアキの目に危険な光が宿った。あ、やべー。
　彼女が両手を伸ばし、俺のほっぺたをつねる。
「うわ。やめろ！　痛いよ」
「せっかく、運んで待っててあげたのに、そんなこと言うから、罰！」
「いや、罰って、おまえ、今日、なんか、おかしいぞ」
　彼女は手を離すとかわいい舌を出して俺を睨んだ。
「おかしいのは、ヒロキくんでしょう？　なに、一人で、ペースも考えずにお酒飲んでたのよ」
　うっ！　なんで、こいつ、知ってるんだ？
「先輩と飲み比べして、つぶすようなやつに言われたくねー」
「飲んでないわよ」
「はあ？　嘘つけ」
「ほんとよ。い、いつもほどは、飲んでない」

　俺は疑わしげにアキを見た。いや、ほんとに疑わしいわけだが。
「なんでだよ。おまえの追い出し会でもあるんだから、飲めばいいだろ」
「だって……」
　そこで彼女の声が急に小さくなった。
「……聞いてないもん」
「え？」
「まだ、聞いてないから」
「なんのことだ？」
「ヒロキくんから、留学のお祝い聞いてない」
「あー」
「そのために、ここで待ってたんだから」

　……そういうことか。
　そういえば、確かに言ったことはなかったな。
　ていうか、なんて言えばいいんだ？
　おめでとう、か？
　頑張ってこいよ、か？
　そう考えるだけで、なぜか胸が苦しくなった。急に心が苛立った。
　そんな言葉を俺から聞きたいために、待ってたのか？
　なんでだよ？　どうして、俺がそんなこと言わなきゃいけないんだよ？
　俺は……
　見つめる彼女の視線が堪らなくなって、俺は言ってしまった。
「誰が、お祝いなんか、言うもんか！　勝手にどこへでも、いっちまえ！」
　アキが驚いたように目を見開いて、それから、哀しそうに瞳を揺らした。
　俺の心になにかが刺さった。
「なんで、そんなこと言うの！　ちゃんと、お祝いしてくれなきゃ、わたしは……わたしは」
　アキの表情が苦しそうに歪んだ。俺はびっくりして、それを見ていた。
　アキは、なにを言おうとしてるんだ？
　俺の心臓の鼓動が上がる。
「ヒロキくんが、ちゃんと言ってくれなきゃ、わたし……行けないじゃない！」
　喘ぐように彼女は言った。その言葉が俺の脳天を貫く。
「じゃあ、行くなよ！」
　とっさにそう叫んでいた。言葉が喉の奥から飛び出すようだった。
「行かなきゃいいじゃないか！　ここに居ろよ！」
　俺の言葉は止まらない。
　そう、ずっといいたかったんだ。彼女が留学すると知ったときから。
　でも、言えなかったんだ。俺に言う権利なんか無いから。そう思っていたから。
　でも、だけど、おまえがそういうのなら、俺は……

「行くなよ！　俺達と一緒にいろよ！　俺と一緒に……いてくれよ！」
　アキが驚いたように、俺を見つめている。彼女が口を開いた。
「どうして？　なんで、そんなこと言うの？　今になって？」
　俺は、その問いに、今なら答えられる。
　今までのもやもやした気持ち。分からなかった気持ち。やっと分かった。
　俺は彼女をしっかり見つめた。

「おまえが好きだから。離れたくないから」

　アキは一瞬、目を見開いて、それから、頬を染めた。
「バカ！　なんで今頃言うのよ」
　彼女の叱責。けれど、伸ばされた腕が俺の首に優しく回される。
　ふたりの顔が近づいて互いの唇が触れた。
　痺れるような感覚。触れる部分の熱さに驚いて、俺は思わず彼女の唇を舌でなめた。
「あふぅ」
　吐息と共に彼女の唇が開く。
　ふたりの舌が触れた。
　その瞬間、互いに相手を求めるように強く吸った。
　心臓がドキドキして、彼女に聞かれるんじゃないかと思った。

　しばらくして離れた後、至近距離で彼女を見つめた。
　初めて見る潤んだ瞳。染まった頬。小さく喘ぐ口元。俺は彼女を離したくない。
「アキ……」
「う、うん？」
「抱いていいか？」
　彼女は一瞬迷った表情を見せて、それから、小さく肯いた。そして、目を瞑る。
　俺はもう一度彼女に口付けた。さっきより更に熱く感じる。
　そして、彼女の服に手を掛けた。

　たぶん隣の部屋で研究室の仲間たちが酔いつぶれているのは分かっていた。
　だけど、俺達はもうそんなこと気にしていなかった。
　お互いが、お互いを求めて、強く抱きしめあった。
　初めて見るアキの裸体は、めちゃくちゃ綺麗だった。
　触れるたびに漏れる彼女の声は、信じられないほどかわいかった。
　そして導かれた彼女の中は、とろけるように熱かった。
　俺は、彼女を離したくないと思いながら、けれど、離れなければならないことを知っていた。
　それが、哀しいのか、辛いのか、自分でも分からない。
　だから、思いっきり彼女を抱いた。

今が、いつまでも続けばいい。いつまでも彼女を感じていたい。
彼女の記憶を刻み込むように。俺の記憶が彼女に刻み込まれるように。
互いが互いを決して忘れないように。
アキが大きく声をあげて仰け反った。そして、俺も……

「ヒロキくんも、来なよ」
「えー、俺がかあ？」
布団の中で裸のまま肌を寄せ合いながら、俺達はお互いを見つめていた。
「俺、おまえほど優秀じゃないからな」
「うん。わかってる」
アキがくすくすと笑った。
「おまえなあ、ちったあ、遠慮っていうもんがないのか？」
「うそだよ。ヒロキくんなら大丈夫」
「……思ってないくせに」
「そんなことないよ」
彼女はそっと俺のくちびるにキスをした。さっきまでとは違う優しいキス。そして、俺に笑いかける。
「だからね、ヒロキくん」
「うん？」
「わたしを迎えに来て」
アキの瞳がキラキラと輝いた。
俺はたまらず彼女を抱きしめる。頬を寄せ彼女の耳元で言った。
「分かった。地球上のどこにいても、行ってやる。覚悟しとけよ」
「うん！」

俺が、飛行機に乗ったのは、一年半後だった。

おわり